

朗読シェイクスピア

佐々木 隆

プロローグ

『ヘンリー五世』のプロローグに次のような台詞がある。

われらのたらざるところを、みなさまの想像力でもって、どうか補って下さい。(省略)

どうか心広き友人のように寛大な目でわれらの芝居をご覧くださいますように。(小田島雄志訳)

「芝居をご覧ください」の原文は *hear our play* である。つまり、劇は観るものではなく、本来「聞く」ものである。このことから、今回上演としてのシェイクスピアではなく、朗読としてのシェイクスピアについて注目してみたい。

一 朗読とは何か

新村出編『広辞苑』（二〇〇八年一月）では「朗読」及び「朗読劇」の見出し語があるので、それぞれその定義を紹介しておきたい。

【朗読】声高く読み上げること。特に、読み方を工夫して趣あるように読むこと。

【朗読劇】役者の身振りや衣装・道具などをほとんど使わずに、朗読を中心に行う演劇。

ここでは、「朗読」と「朗読劇」を区別することが目的ではない。『広辞苑』による定義を整理すると「朗読」は以下がポイントになりそうである。

・ 黙読ではなく、声を出して読むということ。
・ 工夫して読む、趣あるような読み方をする
ことは演技的な内容が含まれていること。

この二点を踏まえると、朗読は相手、すなわち、聴衆がいることを前提にして演じられることになり、読書より演劇として進めることとする。

二 坪内逍遙の朗読法

シェイクスピア作品全訳で知られる坪内逍遙（一八五九〜一九三五）は、国劇、劇術の向上を目指していたが、朗読研究会（一八九〇）、易風会（一九〇五）、文芸協会（一九〇六）へとその実践の場は発展していったことを考えると、逍遙が朗読に注目していた意味が読み取れよう。少なくとも逍遙は「読法を興さんとする趣意」（一八九一）、「脚本の朗読法」（一九二〇）、「脚本朗読術の研究の必要」（一九二九）等を発表している。

逍遙の読法（朗読法）は三種ある。第一に機械的読法、第二に文法的読法、機械的読法を死読法とし、

文法的読法は解釈が伴い、聴く者がよく理解できるという。しかし、これをさらに進めた論理的読法があるとしている。心理的読法とも呼ばれ、人間研究の第一の段階にあると言つてもよいかもしれない。つまり、演劇が台詞中心である以上、作者の意図を読み取ることが演出上大きなプラスになり、新しい国劇の樹立に役立つものと説いているのである。このことはシェイクスピアに代表される西洋の演劇が台詞劇であることをしっかりと認識していることになる。さらに翻訳家としての逍遙が翻訳と同時にこれが脚本となり、読まれること（発話されること）が前提になることを強く意識していることになる。逍遙の朗読法ではひとりて書かれていることすべて読むことになり、ト書き、役名をも読むことになっている。

三 朗読シェイクスピア

「朗読シェイクスピア」とは、ここでは日本で日本語あるいは英語によりシェイクスピア作品の朗読を行うこととする。朗読、あるいは朗読劇と題している場合もある。また、一人芝居となつていても朗読の場合もあるので、適宜取り上げていきたい。

日本でシェイクスピア全作品の朗読を果たしたのは、荒井良雄（一九三五・二〇一五）である。荒井は一九八七年四月から一九九二年四月にかけて日本語あるいは英語で、詩、ソネットも含めたまさしく全作品の朗読を果たした。その内容と記録は荒井良雄『朗読シェイクスピア全集の世界』（一九九三）に収載されている。では、他の朗読シェイクスピアの状況はどうであろうか。ひとり芝居の先駆者、五十田安希は一九七一年にひとり芝居『マクベス夫人』を発表し、以降、五十田安希ひとり芝居を開始しているひとり芝居でシェイクスピア劇上演を開始している

のは二〇〇〇年開始の「楠美津香のひとりシェイクスピア」、二〇一〇年にはサトウ・サラ（佐藤智代）が主宰するS・s PLAYERSの朗読シェイクスピア Reading Shakespeare がある。佐藤は原語ひとり朗読に取り組んでいる。二〇一二年には板橋演劇センターを主宰し、演出を担当し、シェイクスピア劇全作品上演を目指している遠藤栄蔵はソネットの朗読を果たしている。また、The Yokohama Shakespeare Group を主宰している瀬沼達也はYSG 座長一人十色朗読劇として二〇〇三年の『ロミオとジュリエット』を行い、現在も継続中である。一九九〇年に結成された江戸馨主宰の東京シェイクスピア・カンパニーでも二〇〇七年から江戸馨が朗読会夜会特別シリーズとして朗読を開始している。これ以外には朗読に取り組んでいる個人や団体がシェイクスピアに取り組んでいる。その特徴は大別すると三つに分類することができる。第一に作品全体

の朗読、第二に作品一部の朗読、第三に作品の一部分の朗読を組み合わせたオムニバス形式のものである。これには日本語と英語のものがあり、さらにこれが組み合わさる場合もある。朗読者の人数も一人とは限らない。朗読の場合には台本を持って行うことが大きな特徴である。

四 今、なぜ朗読なのか

ICTやSNSがすっかり定着した最近では動画の発信は自由にしても個人でも気軽にできるようになった。メディアが全盛の時代といってもよいだろう。しかし、Youtubeなどの動画を見て、ライブでそのパフォーマンスを見たいと思うことは、これまでTVでコマースシャルに触発されるよりも大きな影響があるかもしれない。そこには素人が発表しているもの、発信しているものもある。インターネット経由の動画、デジタルコンテンツが生活の周囲にあ

る時代では、ライブによるパフォーマンスは新鮮かもしれない。演劇、芝居ともなれば、演出等から開場も大がかりになり、いわゆるチケット代も映画の二倍〜五倍近くになる。これに比べて朗読の場合にはスペースが確保されれば開催しやすくなる。その背景には費用の問題もある。開催者は演劇として上演するよりも費用を抑えられる。こうした活動ができるスペースが確保されやすくなったこと、また、情報等もインターネットを通して発信と受信ができるようになった。メディアの発達により生活や情報入手、コミュニケーション手段は豊富になり便利になったが、人間性を豊かにする、心を豊かにするということを考えれば、演劇に比べて一般の方も演劇にくらべると取り組みやすい。

二〇一四年はシェイクスピア生誕四五〇年ということもあり、ネットで検索してもシェイクスピア朗読があちこちで開催されていることわかる。シェイ

クスピアを高尚なものとして研究の対象にのみするのではなく、芸術家として人がそれを享受すると考えれば、この朗読シェイクスピア・ブームも不思議ではない。このブームは没後四〇〇年を迎える二〇一六年まで続くことは予想がつくところである。

エピソード

日本におけるシェイクスピア劇上演の最初は何であったか。朗読を含めれば、それは升本匡彦『横浜ゲーテ座』(二九八六、第二版)によれば一八六六年二月十九日に『ハムレット』、『夏の夜の夢』の場面抜粋のエンターテイメントがシアー氏によって行われたとの指摘がある。西洋人にとってはまさに遠くの異国の地で仲間の前で披露された朗読がシェイクスピアであった。日本人がシェイクスピアに求めているのは郷愁ではなく、人間を知り尽くした芸術家としての表現、英語圏文化を代表する芸術家の「言

葉の力」ではないだろうか。「言葉、言葉、言葉」は異文化と時代を越えた共通の力である。

追記

シェイクスピア朗読者の第一人者であり、筆者の恩師である荒井良雄先生が二〇一五年四月八日に亡くなった。一九八四年以来三〇年以上にも亘るご指導を受けてきた。二〇一五年三月七日には荒井先生が主催するワークショップで私自身が一時間の講師を務めることになり、先生が体調の優れない中、私の紹介のために二十分近く、私との出会いからシェイクスピア書誌の完成、博士の学位取得に至る経緯を説明され、私には身に余るお言葉だった。三月十五日にもパーティーでお逢いして、五月にまた研究会で会いましょうと約束されてパーティー会場を出られる時、後輩を集めてお見送りしたのが最後になってしまった。先生の生前のご遺志に従い、ご自宅に伺わず、墓参りすることもなく、研究者として先生に深い感謝とご冥福を紙面を借りてお祈りしたい。(合掌)